

Oracle® Collaboration Suite

クイック・インストレーション・ガイド

10g リリース 1 (10.1.1) for Linux x86

部品番号 : B19345-01

2005 年 9 月

ORACLE®

原本名 : Oracle Collaboration Suite Quick Installation Guide, 10g Release 1 (10.1.1) for Linux

原本部品番号 : B15794-02

Copyright © 2005 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性あります。

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一方かこのプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

はじめに

このマニュアルで説明されている各種サービスは日本オラクル社から提供されるサービスです。サービスは、製品をご購入された日本オラクル正規代理店各社から提供される場合もありますが、サービス内容はこのマニュアルの説明と異なることがあります。

- [ご注文内容の確認](#)
- [概要](#)
- [このマニュアルで説明するインストール・タイプ](#)
- [インストーラの起動](#)
- [基本インストールの実行](#)
- [インフラストラクチャおよびアプリケーションのインストールの実行](#)
- [複数コンピュータへのインストールの実行](#)
- [インストール後のタスク](#)
- [要件のチェック](#)
- [「ようこそ」 ページへのアクセス](#)
- [追加情報](#)
- [その他の情報](#)
- [ドキュメントのアクセシビリティについて](#)

1 ご注文内容の確認

メディア・パック受領後、ただちに同梱の **Packing List** をもとにパッケージ内容物を確認してください。破損、欠品、不明な点などのお問合せは、本製品をご購入された日本オラクル正規代理店、もしくは **Oracle Direct** までお寄せください。

メディア・パックには、このマニュアルの他に次の製品が同梱されています。

- 製品メディア

製品メディアには、製品をインストールするためのソフトウェアおよび **README** ファイルが含まれています。

- Start Here CD (赤いレーベル)

Start Here CD には、インストール・マニュアル、リリース・ノート、お役に立つインターネット・リンクおよびメディア・パックに関する情報が含まれています。

- Oracle Collaboration Suite JP Documentation Library

Oracle Collaboration Suite JP Documentation Library には、オラクル製品のオンライン・ドキュメントが含まれています。

注意： メディア・パックによって、Start Here CD や Oracle Collaboration Suite JP Documentation Library が同梱されていない製品があります。**Packing List** を参照して確認してください。

2 概要

このマニュアルでは、Oracle Collaboration Suite のインストール方法について説明します。

3 このマニュアルで説明するインストール・タイプ

このマニュアルは、次の構成で Oracle Collaboration Suite をインストールするユーザーを対象としています。

- 1 台のコンピュータへの Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャおよびアプリケーションのインストール

このトポロジでは、1 台のコンピュータに Oracle Collaboration Suite がインストールされます。Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャと Oracle Collaboration Suite アプリケーションの両方が同じコンピュータにインストールされます。

- 複数コンピュータへのインストール

このトポロジでは、1 台のコンピュータに Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャがインストールされ、別のコンピュータに Oracle Collaboration Suite アプリケーションがインストールされます。

より複雑なトポロジが必要な場合は、Oracle Collaboration Suite のインストール・ガイドで詳細なインストール手順を参照してください。

Oracle Collaboration Suite をインストールする前に、Oracle Collaboration Suite のリリース・ノートで最新情報を確認してください。

4 インストーラの起動

インストーラを起動するには、次のようにします。

1. 42 ページの「要件のチェック」にリストされている最小要件をすべてチェックします。
2. Administrators グループのメンバーであるユーザーとしてコンピュータにログインします。
3. ディスクを挿入します。

Oracle Collaboration Suite のインストール・メディアを挿入します。

4. コンピュータがディスクを自動的にマウントしない場合は、9 ページの「DVD-ROM のマウント」で、DVD-ROM を手動でマウントする手順を参照してください。

Red Hat Enterprise Linux AS/ES システムでディスクが自動的にマウントされたかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# ls /mnt/dvd
```

SUSE Linux Enterprise Server システムでディスクが自動的にマウントされたかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# ls /media/dvd
```

5. インストーラを起動します。Red Hat Enterprise Linux AS/ES では *mountpoint* は `/mnt/dvd` であり、SUSE Linux Enterprise Server では `/media/dvd` です。

注意： マウント・ポイント・ディレクトリからインストーラを実行しないでください。この手順の `cd` コマンドに注意してください。このコマンドは、現行ディレクトリをホーム・ディレクトリに変更するため、インストーラはマウント・ポイントから起動しません。

DVD-ROM の場合は、次のとおりです。

```
# cd
# mountpoint/ocs/runInstaller
```

これにより、Oracle Universal Installer が起動するため、このインストーラを使用して Oracle Collaboration Suite をインストールします。

4.1 DVD-ROM のマウント

コンピュータが DVD-ROM を自動的にマウントしない場合は、次の手順を実行します。

1. DVD-ROM をディスク・ドライブに挿入します。
2. root ユーザーとしてログインし、すべてのユーザーがアクセスできるマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
% su
Password:
# mkdir /dvd
# chmod 777 /dvd
```

3. ドライブをマウント・ポイント・ディレクトリにマウントします。

Red Hat Enterprise Linux AS/ES システムの場合は、次のように入力します。

```
# mount -t iso9660 /dev/dvd /mnt/dvd
```

SUSE Linux Enterprise Server システムの場合は、次のように入力します。

```
# mount -t iso9660 /dev/dvd /media/dvd
```

4. root アカウントを終了します。

```
# exit
```

5 基本インストールの実行

基本インストール方法を使用して Oracle Collaboration Suite を 1 台のコンピュータにインストールするには、次のようにします。

1. インストーラを起動します。詳細は、7 ページの「[インストーラの起動](#)」を参照してください。
2. 「[インストール方法の選択](#)」画面

基本インストール：このインストール方法を選択すると、Oracle Collaboration Suite を迅速にインストールできます。このインストール方法に必要なユーザー入力是最小限です。この画面で指定する次の情報を使用してソフトウェアがインストールされます。

- **インストール・ディレクトリ：**ソフトウェアをインストールするディレクトリ（Oracle ホーム・ディレクトリ）へのフルパスを指定します。
- **パスワード：**管理アカウント（スキーマ）の共通パスワードを指定します。
- **パスワードの確認：**指定したパスワードを再入力して、そのパスワードが正しいことを確認します。
- 「**コンポーネントの選択**」をクリックして「構成するコンポーネントの選択」画面を表示します。この画面では、インストール時に構成しないコンピュータを選択解除できます。

- 「**言語の設定**」をクリックして「言語の選択」画面を表示します。この画面では、**Oracle Collaboration Suite** のインストールに使用される言語を選択できます。

注意：「選択された言語」リストで選択されているデフォルト言語は「英語」です。ただし、**Oracle Collaboration Suite** をインストールするコンピュータのオペレーティング・システムの言語が英語以外の場合は、その言語も「選択された言語」リストに自動的に追加されます。その結果、英語とオペレーティング・システムのロケール言語の 2 つの言語が **Oracle Collaboration Suite** 基本インストールの一部としてインストールされます。

拡張インストール：このインストール方法は、次の場合に選択します。

- カスタム・ソフトウェア・インストールを実行するか、別のデータベース構成を選択する場合
 - インストール・タイプを選択する場合
 - 既存のデータベースを有効にする場合
 - 別の製品言語を選択する場合
 - 管理スキーマごとに異なるパスワードを指定する場合
- 「**基本インストール**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。

3. このコンピュータに今回初めて Oracle 製品をインストールする場合は、次の追加画面が表示されます。

a. 「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面

インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力してください: インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力します。製品ファイルの Oracle ホーム・ディレクトリ以外のディレクトリを入力します。

例: `/home/oracle/oraInventory`

オペレーティング・システム・グループ名の指定: インベントリ・ディレクトリへの書込み権限を付与するオペレーティング・システム・グループを選択します。

例: `oinstall`

「次へ」をクリックします。

b. `orainstRoot.sh` の実行ダイアログ・ボックス

別のシェルで root ユーザーとして `orainstRoot.sh` スクリプトを実行します。このスクリプトは、インベントリ・ディレクトリにあります。

スクリプトを実行した後、「**続行**」をクリックします。

4. 「サマリー」画面

選択内容を確認し、「インストール」をクリックします。

インストーラによってファイルがインストールされます。

5. 「root.sh の実行」ダイアログ・ボックス

注意: このダイアログ・ボックスが表示されるまで、root.sh スクリプトは実行しないでください。

このダイアログ・ボックスが表示されたら、root ユーザーとして別のシェルで root.sh スクリプトを実行します。スクリプトは、このインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにあります。

注意: root.sh のプロンプトで、警告メッセージが表示されることがあります。これらのメッセージは無視し、インストールを続行してください。

「OK」をクリックします。

6. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面

この画面には、コンフィギュレーション・アシスタントの進捗状況が表示されます。コンフィギュレーション・アシスタントによって、Oracle Collaboration Suite コンポーネントが構成されます。

7. インストールの終了画面

「終了」をクリックしてインストーラを終了します。

注意： インストールの最後に表示される情報は、
\$ORACLE_HOME/install/setupinfo.txt ファイルにも格納
されています。このファイルには、Oracle Collaboration Suite に関
する概要情報と、URL へのリンクが含まれています。

6 インフラストラクチャおよびアプリケーションのインストールの実行

このトポロジでは、次のコンポーネントを提供する Oracle Collaboration Suite が 1 台のコンピュータにインストールされます。

- Oracle Collaboration Suite データベース
- Identity Management
- Oracle Collaboration Suite アプリケーション

Oracle Collaboration Suite を 1 台のコンピュータにインストールするには、次のようにします。

1. インストーラを起動します。詳細は、7 ページの「[インストーラの起動](#)」を参照してください。
2. 「インストール方法の選択」画面
「拡張インストール」を選択し、「**次へ**」をクリックします。

3. このコンピュータに今回初めて Oracle 製品をインストールする場合は、次の追加画面が表示されます。

a. 「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面

インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力してください: インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力します。製品ファイルの Oracle ホーム・ディレクトリ以外のディレクトリを入力します。

例: `/home/oracle/oraInventory`

オペレーティング・システム・グループ名の指定: インベントリ・ディレクトリへの書込み権限を付与するオペレーティング・システム・グループを選択します。

例: `oinstall`

「次へ」をクリックします。

b. orainstRoot.sh の実行ダイアログ・ボックス

別のシェルで root ユーザーとして `orainstRoot.sh` スクリプトを実行します。このスクリプトは、インベントリ・ディレクトリにあります。

スクリプトを実行した後、「**続行**」をクリックします。

4. 「ファイルの場所の指定」画面（拡張インストールのみ）

名前: この Oracle ホームを識別する名前を入力します。

例: `infra_home_10_1_1`

インストール先パス: インストール先のディレクトリのフルパスを入力します。これが Oracle ホームです。インストール先のディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって作成されます。

例: `/home/oracle/orainfra`

「次へ」をクリックします。

5. 「インストールする製品の選択」画面（拡張インストールのみ）

Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャおよびアプリケーション 10.1.1.0.2 を選択し、「次へ」をクリックします。

6. 「製品固有の前提条件のチェック」画面（拡張インストールのみ）

この画面では、Oracle Collaboration Suite をインストールおよび構成するためのすべてのシステム要件をシステムが満たしていることを確認します。

注意: カーネル・パラメータのチェックに失敗し、必要な変更を加えた後で「再試行」をクリックした場合、インストーラではチェックが再実行されません。カーネル・パラメータを変更した後で、「ユーザー検証済」を選択して先に進んでください。変更を検証するには、インストーラを再起動する必要があります。

「次へ」をクリックします。

7. 「言語の選択」画面（拡張インストールのみ）

この画面では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントの実行に使用する言語を選択できます。

「使用可能な言語」リストから必要な言語を 1 つまたは複数選択し、「選択された言語」リストに追加します。

「次へ」をクリックします。

8. 「Collaboration Suite Infrastructure および Applications Methodology」画面（拡張インストールのみ）

画面上の説明をよく読んでください。

「次へ」をクリックします。

9. 「構成するコンポーネントの選択」画面（拡張インストールのみ）

インストールする Oracle Collaboration Suite アプリケーション・コンポーネントを選択します。

「次へ」をクリックします。

注意：インストール中（「インストール」ボタンをクリックする前）に、構成するアプリケーションのリストに変更を加える必要がある場合は、インストールを終了し、再起動する必要があります。

10. 「Internet Directory のネームスペースの指定」画面（拡張インストールのみ）

画面に表示されているネームスペースを選択し、「次へ」をクリックします。

18 Oracle Collaboration Suite クイック・インストレーション・ガイド

11. 「データベース構成オプションの指定」画面（拡張インストールのみ）

グローバル・データベース名 : Oracle Collaboration Suite データベースの名前を入力し、データベース名にドメイン名を追加します。

例 : orcl.yourcompany.com

SID: Oracle Collaboration Suite データベースのシステム識別子を入力します。通常はグローバル・データベース名ですが、ドメイン名は含まれません。SID は、すべてのデータベースで一意である必要があります。

例 : orcl

データベース・ファイルの位置の指定 : データファイル・ディレクトリの親ディレクトリのフルパスを指定します。指定したディレクトリはすでに存在している必要があります。このディレクトリでの書込み権限が必要です。

インストーラでは、指定したパスのサブディレクトリにデータファイルがインストールされます。インストーラでは、サブディレクトリの名前にデータベース名が使用されます。たとえば、グローバル・データベース名に orcl.yourcompany.com を指定し、データベース・ファイルの場所に /data/dbfiles を指定した場合は、データベース・ファイルが /data/dbfiles/orcl ディレクトリに配置されます。

「次へ」をクリックします。

12. 「データベース・スキーマのパスワードの指定」画面（拡張インストールのみ）

管理データベース・ユーザーのパスワードを設定します。このユーザーは、データベース管理に使用される権限が付与されたアカウントです。

すべてのユーザーに同じパスワードを使用することも、ユーザーごとに異なるパスワードを指定することもできます。

「次へ」 をクリックします。

13. 「アプリケーション・パスワードの指定」画面（拡張インストールのみ）

インストール時に選択したアプリケーションに対して作成される管理アカウントのパスワードを設定します。

「次へ」 をクリックします。

14. 「Oracle Mail ドメイン情報の指定」画面（拡張インストールのみ）

ローカル・ドメイン：IMAP/SMTP のローカル（ネットワーク）・ドメインまたはその他のメール・プロトコルを指定します。

「次へ」 をクリックします。

15. 「ポート構成オプションの指定」画面（拡張インストールのみ）

「自動」 を選択し、**「次へ」** をクリックします。

16. 「サマリー」画面

選択内容を確認し、「インストール」をクリックします。

インストーラによってファイルがインストールされます。

17. 「root.sh の実行」ダイアログ・ボックス

注意：このダイアログ・ボックスが表示されるまで、`root.sh` スクリプトは実行しないでください。

このダイアログ・ボックスが表示されたら、`root` ユーザーとして別のシェルで `root.sh` スクリプトを実行します。スクリプトは、このインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにあります。

注意：`root.sh` のプロンプトで、警告メッセージが表示されることがあります。これらのメッセージは無視し、インストールを続行してください。

「OK」をクリックします。

1 台のコンピュータへのインフラストラクチャおよびアプリケーションのインストールでは、このダイアログ・ボックスは 2 回表示されます。最初はインフラストラクチャのインストール中、次はアプリケーション層のインストール中です。

18. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面

この画面には、コンフィギュレーション・アシスタントの進捗状況が表示されます。コンフィギュレーション・アシスタントによって、Oracle Collaboration Suite コンポーネントが構成されます。

19. インストールの終了画面

「終了」をクリックしてインストーラを終了します。

注意： インストールの最後に表示される情報は、`$ORACLE_HOME/install/setupinfo.txt` ファイルにも格納されています。このファイルには、Oracle Collaboration Suite に関する概要情報と、URL へのリンクが含まれています。

7 複数コンピュータへのインストールの実行

このトポロジでは、1 台のコンピュータに Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャがインストールされ、別のコンピュータに Oracle Collaboration Suite アプリケーションがインストールされます。

複数コンピュータ・トポロジの設定には、次の作業が含まれます。

- [Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャのインストール](#)
- [Oracle Collaboration Suite アプリケーションのインストール](#)

Oracle Collaboration Suite アプリケーションでは Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャのサービスを使用するため、最初にインフラストラクチャをインストールする必要があります。

7.1 Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャのインストール

新規データベースおよび新規 Oracle Internet Directory とともに Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャをインストールするには、次のようにします。

1. インストーラを起動します。詳細は、7 ページの「[インストーラの起動](#)」を参照してください。
2. 「[インストール方法の選択](#)」画面
「拡張インストール」を選択し、「[次へ](#)」をクリックします。

3. このコンピュータに今回初めて Oracle 製品をインストールする場合は、次の追加画面が表示されます。

- a. 「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面（拡張インストールのみ）

インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力してください：インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力します。製品ファイルの Oracle ホーム・ディレクトリ以外のディレクトリを入力します。

例：/home/oracle/oraInventory

オペレーティング・システム・グループ名の指定：インベントリ・ディレクトリへの書込み権限を付与するオペレーティング・システム・グループを選択します。

例：oinstall

「次へ」をクリックします。

- b. orainstRoot.sh の実行ダイアログ・ボックス（拡張インストールのみ）

別のシェルで root ユーザーとして orainstRoot.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、インベントリ・ディレクトリにあります。

スクリプトを実行した後、「**続行**」をクリックします。

4. 「ファイルの場所の指定」画面（拡張インストールのみ）

名前: この Oracle ホームを識別する名前を入力します。

例: `infra_home_10_1_1`

インストール先パス: インストール先のディレクトリのフルパスを入力します。これが Oracle ホームです。インストール先のディレクトリが存在しない場合は、Oracle Universal Installer によって作成されます。

例: `/home/oracle/orainfra`

「**次へ**」をクリックします。

5. 「インストールする製品の選択」画面（拡張インストールのみ）

Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャ 10.1.1.0.2 を選択し、「**次へ**」をクリックします。

6. 「インストール・タイプの選択」画面（拡張インストールのみ）

「**Identity Management と Collaboration Suite Database**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。

7. 「製品固有の前提条件のチェック」画面（拡張インストールのみ）

この画面では、Oracle Collaboration Suite をインストールおよび構成するためのすべてのシステム要件をシステムが満たしていることを確認します。

注意: カーネル・パラメータのチェックに失敗し、必要な変更を加えた後で「再試行」をクリックした場合、インストーラではチェックが再実行されません。カーネル・パラメータを変更した後で、「ユーザー検証済」を選択して先に進んでください。変更を検証するには、インストーラを再起動する必要があります。

「次へ」をクリックします。

8. 「言語の選択」画面（拡張インストールのみ）

この画面では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントの実行に使用する言語を選択できます。

「使用可能な言語」リストから必要な言語を 1 つまたは複数選択し、「選択された言語」リストに追加します。

「次へ」をクリックします。

9. 「構成オプションの選択」画面（拡張インストールのみ）

「Oracle Internet Directory」を選択します。

「OracleAS Single SignOn」を選択します。

「OracleAS Delegated Administration Service」を選択します。

「Oracle Directory Integration and Provisioning」を選択します。

「OracleAS Certificate Authority」は選択しないでください。

「高可用性およびレプリケーション」は選択しないでください。

「次へ」をクリックします。

10. 「Internet Directory のネームスペースの指定」画面（拡張インストールのみ）

「**推奨ネームスペース**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。

11. 「ポート構成オプションの指定」画面（拡張インストールのみ）

コンポーネントのデフォルトのポートを使用するには、「**自動**」を選択します。

デフォルト・ポートを使用しない場合は、「**ポートを手動で指定**」を選択し、ポートの選択対象のコンポーネントを選択します。

「**次へ**」をクリックします。

12. 「ゲスト・アカウントのパスワード」画面（拡張インストールのみ）

ゲスト・アカウントのパスワードを入力して確認し、「**次へ**」をクリックします。

13. 「データベース構成オプションの指定」画面（拡張インストールのみ）

グローバル・データベース名 : Oracle Collaboration Suite データベースの名前を入力し、データベース名にドメイン名を追加します。

例 : orcd.yourcompany.com

SID : Oracle Collaboration Suite データベースのシステム識別子を入力します。通常はグローバル・データベース名ですが、ドメイン名は含まれません。SID は、すべてのデータベースで一意である必要があります。

例 : orcl

データベース・ファイルの位置の指定: データファイル・ディレクトリの親ディレクトリのフルパスを指定します。指定したディレクトリはすでに存在している必要があります。このディレクトリでの書き込み権限が必要です。

インストーラでは、指定したパスのサブディレクトリにデータファイルがインストールされます。インストーラでは、サブディレクトリの名前にデータベース名が使用されます。たとえば、グローバル・データベース名に `orcl.yourcompany.com` を指定し、データベース・ファイルの場所に `/data/dbfiles` を指定した場合は、データベース・ファイルが `/data/dbfiles/orcl` ディレクトリに配置されます。

「次へ」をクリックします。

14. 「データベース・スキーマのパスワードの指定」画面（拡張インストールのみ）

管理データベース・ユーザーのパスワードを設定します。このユーザーは、データベース管理に使用される権限が付与されたアカウントです。

すべてのユーザーに同じパスワードを使用することも、ユーザーごとに異なるパスワードを指定することもできます。

「次へ」をクリックします。

15. 「インスタンス名と ias_admin パスワードの指定」画面（拡張インストールのみ）

インスタンス名：このインスタンスの名前を入力します。インスタンス名には、英数字以外にドル記号（\$）およびアンダースコア（_）が使用できます。1 台のコンピュータに Oracle Collaboration Suite のインスタンスが複数ある場合、インスタンス名は一意にする必要があります。

例：infra

「ias_admin パスワード」および「パスワードの確認」：ias_admin ユーザーのパスワードを入力し、確認します。このユーザーは、このインスタンスの管理ユーザーです。

パスワードは 5 文字以上で構成されている必要があり、文字の 1 つは数字にする必要があります。

例：welcome99

「次へ」をクリックします。

16. 「サマリー」画面

選択内容を確認し、「インストール」をクリックします。

インストーラによってファイルがインストールされます。

17. 「root.sh の実行」ダイアログ・ボックス

注意：このダイアログ・ボックスが表示されるまで、root.sh スクリプトは実行しないでください。

このダイアログ・ボックスが表示されたら、root ユーザーとして別のシェルで root.sh スクリプトを実行します。スクリプトは、このインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにあります。

注意：root.sh のプロンプトで、警告メッセージが表示されることがあります。これらのメッセージは無視し、インストールを続行してください。

「OK」をクリックします。

18. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面

この画面には、コンフィギュレーション・アシスタントの進捗状況が表示されます。コンフィギュレーション・アシスタントによって、Oracle Collaboration Suite コンポーネントが構成されます。

19. インストールの終了画面

「終了」をクリックしてインストーラを終了します。

注意： インストールの最後に表示される情報は、
\$ORACLE_HOME/install/setupinfo.txt ファイルにも格納
されています。このファイルには、Oracle Collaboration Suite に関
する概要情報と、URL へのリンクが含まれています。

7.2 Oracle Collaboration Suite アプリケーションのインストール

Oracle Collaboration Suite アプリケーションのインストールを開始する前に、次の項で説明するインストール前のタスクを実行する必要があります。

インストール前のタスク

アプリケーション層をインストールする前に、次のコマンドを使用して sendmail が稼働しているかどうかを確認します。

```
prompt> ps -elf | grep sendmail
```

sendmail が稼働している場合は、root ユーザーとして次のように停止します。

```
prompt> service sendmail stop
```

次のコマンドを使用して、sendmail を使用不可にします。

```
prompt> chkconfig sendmail off
```

SUSE システムで、sendmail のかわりに PostFix を使用している場合は、次のコマンドを使用して root ユーザーとして PostFix を停止し、使用不可にします。

```
prompt> /etc/init.d/postfix stop
```

```
prompt> chkconfig postfix off
```

Oracle Collaboration Suite アプリケーションのインストール手順

次の手順では、Oracle Collaboration Suite アプリケーションをインストールし、23 ページの「[Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャのインストール](#)」で説明した手順に従ってインストールした Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャを使用するように構成します。

1. インストーラを起動します。詳細は、7 ページの「[インストーラの起動](#)」を参照してください。
2. 「[インストール方法の選択](#)」画面
「拡張インストール」を選択し、「**次へ**」をクリックします。

3. このコンピュータに今回初めて Oracle 製品をインストールする場合は、次の追加画面が表示されます。

- a. 「インベントリ・ディレクトリと資格証明の指定」画面（拡張インストールのみ）

インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力してください：
インベントリ・ディレクトリのフルパスを入力します。製品ファイルの Oracle ホーム・ディレクトリ以外のディレクトリを入力します。

例：/home/oracle/oraInventory

オペレーティング・システム・グループ名の指定：インベントリ・ディレクトリへの書込み権限を付与するオペレーティング・システム・グループを選択します。

例：oinstall

「次へ」をクリックします。

- b. orainstRoot.sh の実行ダイアログ・ボックス（拡張インストールのみ）

別のシェルで root ユーザーとして orainstRoot.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、インベントリ・ディレクトリにあります。

スクリプトを実行した後、「**続行**」をクリックします。

4. 「ファイルの場所の指定」画面（拡張インストールのみ）

名前：この Oracle ホームを識別する名前を入力します。

例：apptier_home_10_1_1

インストール先パス：インストール先のディレクトリのフルパスを入力します。これが Oracle ホームです。インストール先のディレクトリが存在しない場合は、インストーラによって作成されます。

例：/home/oracle/oraapptier

「次へ」をクリックします。

5. 「ハードウェアのクラスタ・インストール・モードの指定」画面（拡張インストールのみ）

この画面は、コンピュータがハードウェア・クラスタの一部である場合にのみ表示されます。

ハードウェア・クラスタは Oracle Collaboration Suite アプリケーションでサポートされていないため、Oracle Collaboration Suite アプリケーションをインストールしている場合は「ローカル・インストール」を選択します。

「次へ」をクリックします。

6. 「インストールする製品の選択」画面（拡張インストールのみ）

「Oracle Collaboration Suite アプリケーション」を選択します。

追加の言語をインストールするには、「製品の言語」をクリックします。

「次へ」をクリックします。

7. 「製品固有の前提条件のチェック」画面（拡張インストールのみ）

この画面では、Oracle Collaboration Suite をインストールおよび構成するためのすべてのシステム要件をシステムが満たしていることを確認します。

注意：カーネル・パラメータのチェックに失敗し、必要な変更を加えた後で「再試行」をクリックした場合、インストーラではチェックが再実行されません。カーネル・パラメータを変更した後で、「ユーザー検証済」を選択して先に進んでください。変更を検証するには、インストーラを再起動する必要があります。

「次へ」をクリックします。

8. 「言語の選択」画面

この画面では、Oracle Collaboration Suite コンポーネントの実行に使用する言語を選択できます。

「使用可能な言語」リストから必要な言語を 1 つまたは複数選択し、「選択された言語」リストに追加します。

「次へ」をクリックします。

9. 「構成するコンポーネントの選択」画面（拡張インストールのみ）

インストール時に構成する Oracle Collaboration Suite アプリケーション・コンポーネントを選択します。

「次へ」をクリックします。

インストール中（「インストール」ボタンをクリックする前）に、構成するアプリケーションのリストに変更を加える必要がある場合は、インストールを終了し、再起動する必要があります。

10. Oracle Internet Directory への登録（拡張インストールのみ）

ホスト : Oracle Internet Directory が実行されるコンピュータの名前を入力します。

ポート : Oracle Internet Directory がリスニングするポート番号を入力します。ポート番号が不明な場合は、portlist.ini ファイルで Oracle Internet Directory のポートを確認してください。このファイルは、ORACLE_HOME/install ディレクトリにあります。

SSL を使用して Oracle Internet Directory に接続 : Oracle Collaboration Suite のコンポーネントで SSL のみを使用して Oracle Internet Directory に接続する場合は、このオプションを選択します。

「次へ」をクリックします。

11. 「Oracle Internet Directory のユーザー名およびパスワードの指定」画面
(拡張インストールのみ)

ユーザー名 : Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名を入力します。Oracle Internet Directory スーパーユーザーの場合は、cn=orcladmin をユーザー名として使用します。

パスワード : ユーザーのパスワードを入力します。

「次へ」をクリックします。

12. 「OracleAS Metadata Repository」画面 (拡張インストールのみ)

データベース接続文字列 : このアプリケーション層インスタンスに使用する OracleAS メタデータ・リポジトリを選択します。インストーラによって、選択した OracleAS メタデータ・リポジトリにこのインスタンスが登録されます。

「次へ」をクリックします。

13. 「コンポーネント用のデータベースの選択」画面 (拡張インストールのみ)

この画面には、「構成するコンポーネントの選択」画面で選択した各コンポーネントに対して使用されるデータベースが表示されます。

「次へ」をクリックします。

14. 「ポート構成オプションの指定」画面（拡張インストールのみ）

コンポーネントのデフォルトのポートを使用するには、「**自動**」を選択します。

デフォルト・ポートを使用しない場合は、「**ポートを手動で指定**」を選択し、ポートの指定対象のコンポーネントを選択します。

「**次へ**」をクリックします。

15. 「管理パスワードおよびインスタンス名の指定」画面（拡張インストールのみ）

インスタンス名 : Oracle Collaboration Suite 管理アカウントの OracleAS インスタンスの名前を指定します。

管理パスワード : Oracle Collaboration Suite 管理アカウントの初期パスワードを指定します。

パスワードの確認 : パスワードを確認します。

「**次へ**」をクリックします。

16. 「Oracle Calendar Server ホストのエイリアス」画面（拡張インストールのみ）

ホストまたはエイリアス : カレンダ・サーバー・インスタンスのホスト・アドレスまたは別名を指定します。

注意: 後でカレンダー・サーバー・インスタンスを移動したり、ホスト名を変更したりする場合は、ホスト名のかわりに別名を使用することをお勧めします。別名が構成されていない場合は、ホスト名を指定します。

「次へ」をクリックします。

17. 「Oracle Mail ドメイン情報の指定」画面（拡張インストールのみ）

ローカル・ドメイン: IMAP/SMTP のローカル（ネットワーク）・ドメインまたはその他のメール・プロトコルを指定します。

「次へ」をクリックします。

18. 「サマリー」画面

選択内容を確認し、「インストール」をクリックします。

インストーラによってファイルがインストールされます。

19. 「root.sh の実行」ダイアログ・ボックス

注意: このダイアログ・ボックスが表示されるまで、root.sh スクリプトは実行しないでください。

このダイアログ・ボックスが表示されたら、root ユーザーとして別のシェルで root.sh スクリプトを実行します。スクリプトは、このインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにあります。

「OK」をクリックします。

20. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面

この画面には、コンフィギュレーション・アシスタントの進捗状況が表示されます。コンフィギュレーション・アシスタントによって、Oracle Collaboration Suite コンポーネントが構成されます。

21. インストールの終了画面

「終了」をクリックしてインストーラを終了します。

注意： インストールの最後に表示される情報は、`$ORACLE_HOME/install/setupinfo.txt` ファイルにも格納されています。このファイルには、Oracle Collaboration Suite に関する概要情報と、URL へのリンクが含まれています。

8 インストール後のタスク

Oracle Collaboration Suite アプリケーションをインストールした後、次の手順を実行します。

1. ORACLE_HOME を設定します。
2. Oracle Mail をインストールした場合は、次の手順を実行します。

root としてログインし、TNS リスナーを起動します。

```
tnslsnr listener_es -user user_id -group group_id
```

9 要件のチェック

使用するコンピュータが最小要件を満たしていることを確認します。

- ハードウェア要件のチェック
- ソフトウェア要件のチェック
- カーネル・パラメータのチェック
- インベントリ・ディレクトリのオペレーティング・システム・グループの作成
- データベース管理用のオペレーティング・システム・グループの作成
- オペレーティング・システム・ユーザーの作成
- 環境変数のチェック
- ポート 1521 が使用されているかどうかのチェック

9.1 ハードウェア要件のチェック

コンピュータは、次の各項に示すハードウェア要件を満たしている必要があります。

プロセッサおよびネットワークの要件

- 450MHz 以上のプロセッサ速度を推奨します。
- Oracle Collaboration Suite は、ネットワークに接続されていないスタンダードアロン・コンピュータにインストールできます。後でネットワーク構成を変更する場合は、『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』で Oracle Collaboration Suite の再構成に関する情報を参照してください。
- 静的インターネット・プロトコル (IP) アドレス、または動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用して割り当てられた IP アドレス。後で IP 構成を変更する場合は、『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』で Oracle Collaboration Suite の再構成に関する情報を参照してください。

その他のシステム要件

表 1 に、その他のシステム要件を示します。

表 1 最小システム要件

項目	最小要件	コマンド
メモリー	Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャ: 1GB Oracle Collaboration Suite アプリケーション: 1GB Oracle Collaboration Suite データベース: 1GB 注意: 1 台のコンピュータに Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャおよびアプリケーションをインストールする場合は、2GB 以上をお勧めします。	grep MemTotal / proc/meminfo
ディスク領域	Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャ: 8GB Oracle Collaboration Suite アプリケーション: 5GB Oracle Collaboration Suite データベース: 5.4GB	df -k <i>dir</i> Oracle ホーム・ディレクトリがまだ存在していない場合は、 <i>dir</i> を Oracle ホーム・ディレクトリまたは親ディレクトリに置き換えます。

表 1 最小システム要件（続き）

項目	最小要件	コマンド
/tmp ディレクトリの領域	250MB	<code>df -k /tmp</code> /tmp ディレクトリに十分な空き領域がない場合は、 TMP 環境変数を設定して別のディレクトリを指定します。
スワップ領域	1.5GB	<code>grep SwapTotal /proc/meminfo</code> 追加のスワップ領域の構成の詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。
モニター	256 色表示	<code>/usr/X11R6/bin/xdpyinfo</code> Depth 行を探します。各ピクセルに 8 ビット以上の深度が必要です。

9.2 ソフトウェア要件のチェック

Oracle Collaboration Suite は、Red Hat Enterprise Linux AS/ES バージョン 3.0 と、SUSE Linux Enterprise Server 8 および 9 システムでサポートされています。

注意： サポートされているオペレーティング・システム固有のソフトウェア（たとえば、JDK バージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど）の最新リストは、次の URL の *OracleMetaLink* を参照してください。

<http://metalink.oracle.com>

Oracle では、Linux ベンダーでサポートされていないカスタマイズされたカーネルまたはモジュールをサポートしていません。

Linux のディストリビューションに応じて、ソフトウェア要件のチェックに関する情報を次のいずれかの項で参照してください。

- [Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件](#)
- [Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムのソフトウェア要件](#)
- [SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件](#)
- [SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件](#)

Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムのソフトウェア要件

Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 システムに Oracle Collaboration Suite をインストールする前に、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 がインストールされていることを確認します。

```
# cat /etc/issue
```

```
Red Hat Enterprise Linux AS release 3 (Taroon Update 4)
```

サポートされている最小のカーネル・バージョンは、次のとおりです。

- kernel-2.4.21-27.EL
- kernel-smp-2.4.21-27.EL
- kernel-hugemem-2.4.21-27.EL

サポートされているカーネル・バージョンを判断するためのコマンドは、次のとおりです。

```
# rpm -qa | grep kernel
```

3. 次のソフトウェア・パッケージまたはそれ以降のバージョンがインストールされていることを確認します。

```
glibc-2.3.2-95.30
glibc-common-2.3.2-95.30
binutils-2.14.90.0.4-35
compat-glibc-7.x-2.2.4.32.6
compat-libstdc++-7.3-2.96.128
compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.128
gcc-3.2.3-47
gcc-c++-3.2.3-47
libstdc++-3.2.3-47
libstdc++-devel-3.2.3-47
openmotif21-2.1.30-8
pdksh-5.2.14-21
setarch-1.3-1
make-3.79.1-17
gnome-libs-1.4.1.2.90-34.2
sysstat-5.0.5-5.rhel3
compat-db-4.0.14-5.1
```

注意: Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 の場合、
openmotif 2.1.30-8 と同等のバージョンは
openmotif21-2.1.30-8 です。openmotif21-2.1.30-8 パッ
ケージは、次のコマンドを入力して Red Hat Enterprise Linux AS/ES
3.0 ディストリビューションの Disk 3 からインストールできます。

```
# rpm -ivh openmotif21-2.1.30-8
```

パッケージがインストールされているかどうかを判断するには、次の
ようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがない場合は、次のコマンドを使用してダウンロードおよ
びインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする場合は、適切なアーキテクチャおよび
最適化 rpm ファイルを使用していることを確認します。rpm ファイル
のアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}\n"
```

次の例では、glibc rpm ファイルは Intel アーキテクチャに適しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}\n"
i686
```

4. hugemem カーネルが使用されている場合は、次のコマンドを使用してアーキテクチャを設定します。

```
# setarch i386
```

hugemem カーネルは、マルチプロセッサ・コンピュータにソフトウェアをインストールする場合に使用されます。このカーネルを使用すると、メイン・メモリーが 64GB までのシステムで Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 を実行できます。hugemem カーネルは、より少ないメモリーで稼働する構成にも利点があります。たとえば、プロセス当たりのユーザー領域がより大きい場合に有利なアプリケーションを実行している場合は、hugemem カーネルが非常に役立つ場合があります。

Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムのソフトウェア要件

Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 システムに Oracle Collaboration Suite をインストールする前に、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 がインストールされていることを確認します。

```
# cat /etc/issue
```

```
Red Hat Enterprise Linux AS release 4 (Nahant Update 1)
```

サポートされている最小のカーネル・バージョンは、次のとおりです。

- kernel-2.6.9-11.EL
- kernel-smp-2.6.9-11.EL
- kernel-hugemem-2.6.9-11.EL

サポートされているカーネル・バージョンを判断するためのコマンドは、次のとおりです。

```
# rpm -qa | grep kernel
```

3. 次のソフトウェア・パッケージまたはそれ以降のバージョンがインストールされていることを確認します。

```
glibc-2.3.4-2.9  
glibc-common-2.3.4-2.9  
binutils-2.15.92.0.2-13  
compat-glibc-2.3.2-95.30  
compat-libstdc++-296-2.96-132.7.2  
compat-libstdc++-devel-296-2.96-132.7.2  
gcc-3.4.3-22.1  
gcc-c++-3.4.3-22.1  
libstdc++-3.4.3-22.1  
libstdc++-devel-3.4.3-22.1  
openmotif21-2.1.30-11.RHEL4.4  
pdksh-5.2.14-30  
setarch-1.6-1  
make-3.80-5  
gnome-libs-1.4.1.2.90-44.1  
sysstat-5.0.5-1  
compat-db-4.1.25-9
```

注意: openmotif21-2.1.30-11.RHEL4.4 パッケージは、次のように入力して、Red Hat Enterprise Linux AS/ES 4.0 ディストリビューションの Disk 3 からインストールできます。

```
# rpm -ivh openmotif21-2.1.30-11.RHEL4.4
```

パッケージがインストールされているかどうかを判断するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがない場合は、次のコマンドを使用してダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする場合は、適切なアーキテクチャおよび最適化 rpm ファイルを使用していることを確認します。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}\n"
```

次の例では、glibc rpm ファイルは Intel アーキテクチャに適しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}\n"
i686
```

4. **hugemem** カーネルが使用されている場合は、次のコマンドを使用してアーキテクチャを設定します。

```
# setarch i386
```

hugemem カーネルは、マルチプロセッサ・コンピュータにソフトウェアをインストールする場合に使用されます。このカーネルを使用すると、メイン・メモリーが **64GB** までのシステムで **Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0** を実行できます。**hugemem** カーネルは、より少ないメモリーで稼働する構成にも利点があります。たとえば、プロセス当たりのユーザー領域がより大きい場合に有利なアプリケーションを実行している場合は、**hugemem** カーネルが非常に役立つ場合があります。

SUSE Linux Enterprise Server 8 システムのソフトウェア要件

SUSE Linux Enterprise Server 8 システムに Oracle Collaboration Suite をインストールする前に、次の手順を実行します。

1. **root** ユーザーとしてログインします。
2. SUSE Linux Enterprise Server 8 がインストールされていることを確認します。

```
# cat /etc/issue
```

```
Welcome to SuSE Linux 8.0 (i686) - Kernel \r (\l).
```

3. SP3 がインストールされていることを確認します。サービス・パックのバージョンを判断するには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r  
k_smp-2.4.21-138
```

カーネル・バージョンに 2.4.21 という文字列が含まれている場合は、SP3 がインストールされています。SP3 は、Oracle Collaboration Suite 10g リリース 1 (10.1.1) で動作が保証されています。

SP3 の場合、サポートされている最小のカーネル・バージョンは、次のとおりです。

- k_smp-2.4.21-138
- k_deflt-2.4.21-138
- k_psmpp-2.4.21-138

4. 次のソフトウェア・パッケージまたはそれ以降のバージョンがインストールされていることを確認します。

```
glibc-2.2.2-124  
gcc-3.2.2-38  
gcc-c++-3.2.2-38  
pdksh-5.2.14  
openmotif-2.1.30MLI4  
sysstat-4.0.3  
libstdc++-3.2.2
```

```
make-3.79.1-407  
binutils-2.12.90.0.15-50  
compat-2003.1.10-0
```

パッケージがインストールされているかどうかを判断するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがない場合は、次のコマンドを使用してダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする場合は、適切なアーキテクチャおよび最適化 rpm ファイルを使用していることを確認します。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}\n"
```

次の例では、glibc rpm ファイルは Intel アーキテクチャに適しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}\n"  
i686
```

5. perl 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクがまだ存在していない場合は、これを作成します。

```
# ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

6. fuser 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクがまだ存在していない場合は、これを作成します。

```
# ln -sf /bin/fuser /sbin/fuser
```

7. orarun パッケージがインストールされている場合は、次の手順を実行して環境をリセットします。

- a. root ユーザーとして次のコマンドを入力します。

```
# cd /etc/profile.d
# mv oracle.csh oracle.csh.bak
# mv oracle.sh oracle.sh.bak
# mv alljava.sh alljava.sh.bak
# mv alljava.csh alljava.csh.bak
```

- b. oracle ユーザー・アカウントにログインします。

- c. 任意のテキスト・エディタを使用して、\$HOME/.profile ファイルの次の行をコメントに変換します（このファイルが存在する場合）。

```
. ~/.oracle
```

- d. oracle ユーザー・アカウントからログアウトします。
 - e. 変更を有効にするには、oracle ユーザー・アカウントにログインします。
8. 任意の Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、JAVA_HOME などの Java 環境変数の設定を解除します。

注意： SLES 8 ディストリビューションで提供される Java パッケージはインストールしないことをお勧めします。

9. /etc/services ファイルをチェックして、次のポート範囲が使用可能であることを確認します。
- Oracle Internet Directory に必要なポート 3060 ～ 3129
 - Oracle Internet Directory (SSL) に必要なポート 3130 ～ 3199
 - Oracle Enterprise Manager (コンソール) に必要なポート 1812 ～ 1829
 - Oracle Enterprise Manager (エージェント) に必要なポート 1830 ～ 1849
 - Oracle Enterprise Manager (RMI) に必要なポート 1850 ～ 1869

必要に応じて、`/etc/services` ファイルからエントリを削除し、システムを再起動します。エントリを削除するには、**Oracle Collaboration Suite** のインストール・メディアの `utils/3167528/` ディレクトリに含まれている **Perl** スクリプトを使用できます。`root` ユーザーとしてスクリプトを実行します。このスクリプトは、パッチ **3167528** としても使用できます。このパッチは次の場所から入手できます。

`http://metalink.oracle.com`

これらのポートが使用可能でない場合は、関連するコンフィギュレーション・アシスタントがインストール時に失敗します。

10. ネットワーク情報サービス (NIS) を使用している場合は、次のことを確認します。
 - a. `/etc/yp.conf` ファイルに次の行が存在すること。
`hostname.domainname broadcast`
 - b. `/etc/nsswitch.conf` ファイルに次の行が存在すること。
`hosts: files nis dns`

11. `/etc/hosts` ファイルの `localhost` エントリが IPv4 エントリであることを確認します。`localhost` の IP エントリが IPv6 形式の場合は、インストールが正常に終了しません。次に、IPv6 エントリの例を示します。

```
# special IPv6 addresses
::1          localhost ipv6-localhost ipv6-loopback
::1          ipv6-localhost ipv6-loopback
```

この例の `/etc/hosts` ファイルを修正するには、次のように `localhost` エントリをコメントにします。

```
# special IPv6 addresses
# ::1          localhost ipv6-localhost ipv6-loopback
# ::1          ipv6-localhost ipv6-loopback
```

エントリをコメントにするには、Oracle Collaboration Suite のインストール・メディアの `utils/4015045/` ディレクトリに含まれている Perl スクリプトを使用できます。root ユーザーとしてスクリプトを実行します。このスクリプトは、パッチ 4015045 としても使用できません。このパッチは次の場所から入手できます。

<http://metalink.oracle.com>

SUSE Linux Enterprise Server 9 システムのソフトウェア要件

SUSE Linux Enterprise Server 9 システムに Oracle Collaboration Suite をインストールする前に、次の手順を実行します。

1. root ユーザーとしてログインします。
2. SUSE Linux Enterprise Server 9 がインストールされていることを確認します。

```
# cat /etc/issue
```

```
Welcome to SuSE Linux 9.0 (i686) - Kernel \r (\l).
```

3. 次のコマンドを入力して、Linux カーネル・バージョン kernel-bigsmpt-2.6.5-7.97、kernel-default-2.6.5-7.97 または kernel-smp-2.6.5-7.97 がインストールされていることを確認します。

```
# uname -r
```

```
kernel-bigsmpt-2.6.5-7.97
```

4. 次のソフトウェア・パッケージまたはそれ以降のバージョンがインストールされていることを確認します。

```
glibc-2.3.3-98.28
```

```
gcc-3.3.3-43.24
```

```
gcc-c++-3.3.3-43.24
```

```
glibc-2.3.3-98.28
```

```
libstdc++-3.3.3-43.24
```

```
libstdc++-devel-3.3.3-43.24
```

```
openmotif21-libs-2.1.30MLI4-119.1  
pdksh-5.2.14-780.1  
make-3.80-184.1  
gnome-libs-1.4.1.7-671.1  
gnome-libs-devel-1.4.1.7-671.1  
sysstat-5.0.1-35.1  
binutils-2.15.90.0.1.1-32.5  
db1-1.85-85.1  
compat-2004.7.1-1.2
```

パッケージがインストールされているかどうかを判断するには、次のようなコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがない場合は、次のコマンドを使用してダウンロードおよびインストールします。

```
# rpm -i package_name
```

パッケージをインストールする場合は、適切なアーキテクチャおよび最適化 rpm ファイルを使用していることを確認します。rpm ファイルのアーキテクチャを確認するには、次のコマンドを使用します。

```
# rpm -q package_name --queryformat "%{arch}\n"
```

次の例では、glibc rpm ファイルは Intel アーキテクチャに適しています。

```
# rpm -q glibc --queryformat "%{arch}\n"
i686
```

5. perl 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクがまだ存在していない場合は、これを作成します。

```
# ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

6. fuser 実行可能ファイルに対して次のシンボリック・リンクがまだ存在していない場合は、これを作成します。

```
# ln -sf /bin/fuser /sbin/fuser
```

7. orarun パッケージがインストールされている場合は、次の手順を実行して環境をリセットします。

- a. root ユーザーとして次のコマンドを入力します。

```
# cd /etc/profile.d
# mv oracle.csh oracle.csh.bak
# mv oracle.sh oracle.sh.bak
# mv alljava.sh alljava.sh.bak
# mv alljava.csh alljava.csh.bak
```

- b. oracle ユーザー・アカウントにログインします。

- c. 任意のテキスト・エディタを使用して、`$HOME/.profile` ファイルの次の行をコメントにします（このファイルが存在する場合）。

```
. ~/.oracle
```

- d. `oracle` ユーザー・アカウントからログアウトします。
- e. 変更を有効にするには、`oracle` ユーザー・アカウントにログインします。

- 8. 任意の Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、`JAVA_HOME` などの Java 環境変数の設定を解除します。

注意： SLES 9 ディストリビューションで提供される Java パッケージはインストールしないことをお勧めします。

- 9. `/etc/services` ファイルをチェックして、次のポート範囲が使用可能であることを確認します。
 - Oracle Internet Directory に必要なポート 3060 ～ 3129
 - Oracle Internet Directory (SSL) に必要なポート 3130 ～ 3199
 - Oracle Enterprise Manager (コンソール) に必要なポート 1812 ～ 1829

- Oracle Enterprise Manager (エージェント) に必要なポート
1830 ~ 1849
- Oracle Enterprise Manager (RMI) に必要なポート 1850 ~ 1869

必要に応じて、`/etc/services` ファイルからエントリを削除し、システムを再起動します。エントリを削除するには、Oracle Collaboration Suite のインストール・メディアの `utils/3167528/` ディレクトリに含まれている Perl スクリプトを使用できます。root ユーザーとしてスクリプトを実行します。このスクリプトは、パッチ 3167528 としても使用できます。このパッチは次の場所から入手できます。

<http://metalink.oracle.com>

これらのポートが使用可能でない場合は、関連するコンフィギュレーション・アシスタントがインストール時に失敗します。

10. ネットワーク情報サービス (NIS) を使用している場合は、次のことを確認します。

- a. `/etc/yp.conf` ファイルに次の行が存在すること。

```
hostname.domainname broadcast
```

- b. `/etc/nsswitch.conf` ファイルに次の行が存在すること。

```
hosts: files nis dns
```

11. `/etc/hosts` ファイルの `localhost` エントリが IPv4 エントリであることを確認します。`localhost` の IP エントリが IPv6 形式の場合は、インストールが正常に終了しません。次に、IPv6 エントリの例を示します。

```
# special IPv6 addresses
::1          localhost ipv6-localhost ipv6-loopback
::1          ipv6-localhost ipv6-loopback
```

この例の `/etc/hosts` ファイルを修正するには、次のように `localhost` エントリをコメントにします。

```
# special IPv6 addresses
# ::1          localhost ipv6-localhost ipv6-loopback
# ::1          ipv6-localhost ipv6-loopback
```

エントリをコメントにするには、インストール・メディアの `ocs/utils/4015045/` ディレクトリに含まれている Perl スクリプトを使用できます。root ユーザーとしてスクリプトを実行します。このスクリプトは、パッチ 4015045 としても使用できます。このパッチは次の場所から入手できます。

<http://metalink.oracle.com>

9.3 カーネル・パラメータのチェック

次の表に示すカーネル・パラメータが、示されている推奨値またはそれよりも大きい値に設定されていることを確認します。表の後の手順では、値の検証および設定の方法について説明します。

パラメータ	値	ファイル
semmsl	256	/proc/sys/kernel/sem
semmns	32000	
semopm	100	
semmni	142	
shmall	3279547	/proc/sys/kernel/shmall
shmmax	2147483648	/proc/sys/kernel/shmmax
shmseg	10	/proc/sys/kernel/shmseg
shmmni	4096	/proc/sys/kernel/shmmni
msgmax	8192	/proc/sys/kernel/msgmax
msgmnb	65535	/proc/sys/kernel/msgmnb
msgmni	2878	/proc/sys/kernel/msgmni

パラメータ	値	ファイル
file-max	327679	/proc/sys/fs/file-max
ip_local_port_range	10000 65000	/proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range

注意： この表に示す値よりもパラメータの現在の値のほうが大きい場合は、そのパラメータの値を変更しないでください。

これらのカーネル・パラメータに現在指定されている値を表示し、必要に応じて値を変更するには、次の手順を実行します。

1. 次のようなコマンドを入力して、カーネル・パラメータの現在の値を表示します。

パラメータ	コマンド
semmsl、semms、semopm および semmni	# /sbin/sysctl -a grep sem このコマンドは、リストされている順序でセマフォ・パラメータの値を表示します。

パラメータ**コマンド**

shmalls、shmmax および semmni # /sbin/sysctl -a | grep shm

msgmax、msgmnb および msgmni # /sbin/sysctl -a | grep msg

file-max # /sbin/sysctl -a | grep file-max

ip_local_port_range # /sbin/sysctl -a | grep
ip_local_port_range
このコマンドは、ポート番号の範囲を表示します。

2. いずれかのカーネル・パラメータの値が推奨値と異なる場合は、次の手順を実行します。
 - a. 任意のテキスト・エディタを使用して、/etc/sysctl.conf ファイルを作成または編集し、次のような行を追加または編集します。

注意： 変更するカーネル・パラメータ値に対してのみ行を挿入します。セマフォ・パラメータ (`kernel.sem`) の場合は、4 つの値をすべて指定する必要があります。ただし、現在の値のいずれかが推奨値よりも大きい場合は、大きいほうの値を指定します。

```
kernel.shmall = 3279547
kernel.shmmax = 2147483648
kernel.shmmni = 4096
# semaphores: semmsl, semmns, semopm, semmni
kernel.sem = 256 32000 100 142
fs.file-max = 327679
net.ipv4.ip_local_port_range = 10000 65000
kernel.msgmni = 2878
kernel.msgmax = 8192
kernel.msgmnb = 65535
```

/etc/sysctl.conf ファイルで値を指定することにより、システムの再起動時に値が永続化されます。

- b. 次のコマンドを入力して、カーネル・パラメータの現在の値を変更します。

```
# /sbin/sysctl -p
```

このコマンドからの出力を調べて、値が正しいことを確認します。値が不正な場合は、`/etc/sysctl.conf` ファイルを編集し、このコマンドを再び入力します。

- c. SUSE Linux Enterprise Server システムでのみ、次のコマンドを入力して、システムが再起動時に `/etc/sysctl.conf` ファイルを読み込むようにします。

```
# chkconfig boot.sysctl on
```

oracle ユーザーのシェル制限の設定

Linux システム上のソフトウェアのパフォーマンスを改善するには、ユーザーのデフォルト・シェルに応じて、oracle ユーザーの次のシェル制限を増やす必要があります。

Bourne または Bash シェルの制限	Korn シェ ルの制限	C または tcsh シェルの制限	ハード制限
nofile	nofile	descriptors	65536
noproc	processes	maxproc	16384

シェル制限を増やすには、次のようにします。

1. `/etc/security/limits.conf` ファイルに次の行を追加します。

```
*      soft    nproc      4096
*      hard    nproc      16384
*      soft    nofile     4096
*      hard    nofile     65536
```

注意： Oracle Collaboration Suite をインストールしているコンピュータにセキュア・シェル（SSH）を使用してログインしている場合は、次の手順を実行します。

1. `/etc/ssh/sshd_config` ファイルを編集して、`UsePrivilegeSeparation no` を反映します。
2. 次のコマンドを使用して、`sshd` デーモンを再起動します。
`/sbin/service sshd restart`

-
-
2. `/etc/pam.d/login` ファイルに次の行がまだ存在していない場合は、これを追加します。

```
session    required    /lib/security/pam_limits.so
```

3. oracle ユーザーのデフォルト・シェルに応じて、デフォルト・シェルのスタートアップ・ファイルに次の変更を加えます。

Bourne、Bash または Korn シェルの場合は、次の行を /etc/profile ファイルに追加します。

```
if [ $USER = "oracle" ]; then
    if [ $SHELL = "/bin/ksh" ]; then
        ulimit -p 16384
        ulimit -n 65536
    else
        ulimit -u 16384 -n 65536
    fi
fi
```

C または tcsh シェルの場合は、次の行を /etc/csh.login ファイルに追加します。

```
if ( $USER == "oracle" ) then
    limit maxproc 16384
    limit descriptors 65536
endif
```

9.4 インベントリ・ディレクトリのオペレーティング・システム・グループの作成

今回初めて Oracle 製品をコンピュータにインストールする場合は、インベントリ・ディレクトリのオペレーティング・システム・グループを作成します。インストーラでは、インベントリ・ディレクトリにファイルが作成され、コンピュータにインストールされた Oracle 製品が管理されます。

このマニュアルでは、このグループに oinstall という名前を使用します。

75 ページの「[オペレーティング・システム・ユーザーの作成](#)」で、オペレーティング・システム・ユーザーを作成し、oinstall グループをユーザーのプライマリ・グループとして設定します。

インベントリ・ディレクトリの個別のグループを持つことにより、別のユーザーがコンピュータに Oracle 製品をインストールできるようになります。ユーザーには、インベントリ・ディレクトリへの書込み権限が必要です。書込み権限は、oinstall グループに属することによって付与されません。

インベントリ・ディレクトリのデフォルト名は、oraInventory です。

コンピュータにすでにインベントリ・ディレクトリがあるかどうかを判断するには、`/etc/oraInst.loc` ファイルを検索してください。このファイルには、インベントリ・ディレクトリの場所と所有しているグループが一覧表示されています。このファイルがない場合は、コンピュータに Oracle 製品がインストールされていません。

グループの作成方法

oinstall グループを作成するには、root ユーザーとして次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/groupadd oinstall
```

9.5 データベース管理用のオペレーティング・システム・グループの作成

データベース管理用の dba というオペレーティング・システム・グループを作成するには、root ユーザーとして次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/groupadd dba
```

次にオペレーティング・システム・ユーザーを作成するときに、この dba グループをユーザーのセカンダリ・グループとして設定します。

9.6 オペレーティング・システム・ユーザーの作成

Oracle 製品をインストールおよびアップグレードするオペレーティング・システム・ユーザーを作成します。このマニュアルでは、このユーザーを oracle ユーザーと呼びます。

ユーザーの作成方法

oracle オペレーティング・システム・ユーザーを oinstall および dba グループの一部として作成するには、root ユーザーとして次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall -G dba oracle
```

オペレーティング・システムのユーザーとグループの詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照するか、またはシステム管理者に連絡してください。

次のコマンドを入力し、画面の指示に従って oracle ユーザーのパスワードを設定します。

```
# passwd oracle
```

9.7 環境変数のチェック

Oracle Collaboration Suite をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、[表 2](#) にリストされている環境変数を設定または解除する必要があります。

表 2 環境変数

環境変数	設定または解除
DISPLAY	インストーラのウィンドウを表示するモニターに設定します。
ORACLE_HOME	設定しません。
ORACLE_SID	設定しません。
TNS_ADMIN	設定しません。
PATH、CLASSPATH および LD_LIBRARY_PATH	いずれかの Oracle ホーム・ディレクトリのディレクトリへの参照を含めないようにする必要があります。
TMP	オプションです。設定を解除すると、デフォルトで /tmp に設定されます。
ORA_NLS33	設定しません。
LD_BIND_NOW	設定しません。

環境変数の設定方法

この項では、環境変数の設定方法について説明します。

C シェルを使用する場合：

```
% setenv variable_name value
```

例（C シェル）：

```
% setenv DISPLAY test.mycompany.com:0.0
```

Bourne または Korn シェルを使用する場合：

```
$ variable_name=value; export variable_name
```

例（Bourne または Korn シェル）：

```
$ DISPLAY=test.mydomain.com:0.0; export DISPLAY
```

環境変数のヒント

この項では、環境変数を設定する際の注意事項をいくつか説明します。

- .profile ファイルで環境変数を設定すると、読み込まれない場合があります。環境変数が正しい値に設定されていることを確認するには、インストーラを実行するシェルでこれらの値を調べます。

- 環境変数の値を調べるには、`env` コマンドを使用します。このコマンドを使用すると、現在定義されている環境変数とその値がすべて表示されます。

```
% env
```

- ユーザーの切替え(`root` ユーザーから `oracle` ユーザーへの切替えなど)に `su` コマンドを使用する場合は、環境変数が新規ユーザーに渡されないことがあるため、新規ユーザーの場合は環境変数を確認します。- パラメータを指定して `su` コマンドを使用した場合 (`su - user`) も、環境変数が新規ユーザーに渡されないことがあります。

```
# /* root user */  
# su - oracle  
% env
```

9.8 ポート 1521 が使用されているかどうかのチェック

この項は、Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャをインストールする場合にのみ適用されます。

Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャは、デフォルトでポート 1521 を使用する Oracle データベースをインストールします。

ポート 1521 が使用されているかどうかをチェックするには、次のようにします。

```
# netstat -an | grep 1521
```

ポート 1521 がサード・パーティ・アプリケーションで使用されている場合は、別のポートを使用するようにアプリケーションを構成する必要があります。

ポート 1521 が既存の Oracle データベース・リスナーで使用されている場合は、Oracle Collaboration Suite インフラストラクチャをインストールする前にリスナーを停止する必要があります。

10 「ようこそ」 ページへのアクセス

インストール後に、Oracle Collaboration Suite の「ようこそ」 ページにアクセスして、インストールが正常に終了したことを確認します。「ようこそ」 ページの URL は次のとおりです。

`http://hostname.domainname:http_port`

ORACLE_HOME/install/portlist.ini ファイルを参照して、*http_port* を判別します。ポートは、Oracle HTTP Server listen port 行にリストされています。

注意： 1 台のコンピュータに Oracle Collaboration Suite の複数のインスタンスをインストールした場合は、各インスタンスが独自のポート番号セットを持ちます。適切な Oracle ホーム・ディレクトリの portlist.ini ファイルをチェックして、正しいポート番号を使用していることを確認してください。

「ようこそ」ページには、次のような有用なページへのリンクがあります。

- Oracle Collaboration Suite 10g リリース 1 (10.1.1) の新機能
- ブラウザベースの管理ツールである Oracle Enterprise Manager Application Server Control (Application Server Control)
- リリース・ノート
- デモ

11 追加情報

この項では、次の内容について説明します。

- 製品のライセンス
- オラクル社カスタマ・サポート・センターへのお問合せ
- 製品マニュアルの入手方法

11.1 製品のライセンス

このメディア・パックに含まれている製品は、トライアル・ライセンス契約に基づき、30 日間、インストールおよび評価できます。ただし、30 日間の評価期間後もいずれかの製品の使用を継続する場合、プログラム・ライセンスをご購入いただく必要があります。

11.2 オラクル社カスタマ・サポート・センターへのお問合せ

Oracle 製品サポートをご購入いただいた場合、オラクル社カスタマ・サポート・センターに、年中無休で 24 時間いつでも、お問い合わせいただけます。Oracle 製品サポートの購入方法、またはオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、オラクル社カスタマ・サポート・センターの Web サイトを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

11.3 製品マニュアルの入手方法

Oracle 製品のマニュアルは、HTML および Adobe 社 PDF 形式で提供されており、入手方法がいくつかあります。

- メディア・パック内のディスク：
 - プラットフォーム固有のマニュアルは、製品ディスクに含まれています。マニュアルにアクセスするには、**CD-ROM** のトップレベル・ディレクトリにある `welcome.htm` ファイルを参照してください。
- Oracle Technology Network Japan の Web サイト：

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

PDF ドキュメントを表示するには、必要に応じて、Adobe 社の Web サイトから、無料の Adobe Acrobat Reader をダウンロードしてください。

<http://www.adobe.com/>

12 その他の情報

12.1 クイック・リファレンス

リソース	連絡先 / Web サイト
開発者向けのテクニカル・リソースにアクセスできます。	http://otn.oracle.co.jp/
インストール・マニュアルにアクセスできます。	http://otn.oracle.co.jp/tech/install/
サポート・サービスに関する情報にアクセスできます。	http://www.oracle.co.jp/support/
日本オラクル技術営業の連絡先です。	0120-155-096 (受付時間等の詳細は後述します。)

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

12.2 オラクル製品のインストールに関する情報

オラクル製品のインストールに関する情報およびマニュアルを提供しています。

次の URL を参照してください。ただし、個々の環境に依存する問題または検証が必要となるようなケースでは、サポート・サービス（有償）の契約が必要になりますのでご了承ください。

□ OTN インストール・センター

<http://otn.oracle.co.jp/>

「OTN」→「テクノロジーセンター」→「インストール」

□ Oracle Technology Network 掲示板

<http://otn.oracle.co.jp/>

「OTN」→「掲示板」→「ビギナー」の「初心者部屋」

□ インストレーション・ガイド・ダウンロード

<http://otn.oracle.co.jp/>

「OTN」→「ドキュメント」→「製品名」→「OS」

□ 製品 FAQ 検索

<http://support.oracle.co.jp/>

「Oracle Internet Support Center」→「製品 FAQ 検索」

キーワード：「インストール」、「install」など

これらのキーワードを参照しても解決されないインストール時の不明点または問題点については支援サービスを提供しています。次のオラクル製品が対象になりますので次の URL から質問してください。

http://www.oracle.co.jp/install_service/

- 対象製品：
 - Oracle Database Standard Edition
 - Oracle Database Personal Edition
 - Oracle9i Application Server Java Edition
 - Oracle Application Server 10g Java Edition
- 対象 OS:
 - Linux x86
 - Microsoft Windows

12.3 Oracle Technology Network Japan

OTN Japan は開発者に必要な技術リソースを提供する登録制、日本オラクル公式技術サイトです。OTN Japan に登録（無償）していただくと、技術資料、オンライン・マニュアル、ソフトウェア・ダウンロード、サンプル・コード、掲示板、ポイント・プログラム、オラクル関連書籍のディスカウント、OTN 有償プログラムなど様々なサービスを受けることができます。

☐ OTN Japan 登録方法

<http://otn.oracle.co.jp/>

この URL から「OTN の歩き方」を参照してください。

☐ 技術資料

<http://otn.oracle.co.jp/products/>

オラクル製品の最新情報を提供します。目的とする技術資料を容易に参照できるわかりやすいカテゴリになっています。

☐ ソフトウェア・ダウンロード

<http://otn.oracle.co.jp/software/>

オラクル製品のトライアル版、早期アクセス版、ユーティリティ、ドライバなどを無償でダウンロードできます。最新バージョンをタイムリに掲載していますので、OTN Japan で提供している技術資料、ドキュメント等とあわせて使用することにより、いち早く最新のオラクル・テクノロジーを体験できます。

□ ドキュメント

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

オラクル製品のインストレーション・ガイド、リリース・ノート等のドキュメント（マニュアル）を掲載しています。製品に同梱されているドキュメントから有償マニュアルにいたるまで、最新のドキュメントをタイムリに掲載しています。

□ サンプル・コード

http://otn.oracle.co.jp/sample_code/

開発者に参考としていただけるよう、プログラムのサンプルを掲載しています。オラクル最新テクノロジーに準拠したサンプル・プログラムの数々をお役立てください。

□ 掲示板

<http://otn.oracle.co.jp/forum/>

オラクル製品を使用して開発される皆様のためのコミュニティです。**Web** によるディスカッション・フォーラム（掲示板）を通して、オラクル開発者間での情報交換ができます。それぞれの開発ノウハウを共有することで、より効率的な開発ができます。**OTN** 掲示板専用のビューア「**OTN Viewer**」も使用していただけます。

□ ポイント・プログラム

<http://otn.oracle.co.jp/point/index.html>

OTN Japan 活性化に貢献された会員の皆様にポイント進呈する OTN ポイント・プログラムを設けています。獲得ポイントは OTN グッズと交換したり、掲示板投稿時の懸賞ポイントとして使用できます。

□ OTN 有償プログラム

<http://otn.oracle.co.jp/upgrade/index.html>

OTN 有償プログラムは、OTN 会員の皆様向けの有償アップグレード・サービスです。OTN Japan サイトで提供している無償サービスに加え、最新のオラクル製品を開発ライセンスで使用していただける OTN Software Kit（日本語版 CD-ROM）の送付やオラクル技術書籍ご購入時のディスカウントなど、有償ならではの様々なサービスを提供します。

□ お薦めサービス「SQL 構文検索サービス」

<http://otn.oracle.co.jp/document/sqlconst/>

SQL 文や SQL 関数をオンラインで参照できる SQL 構文検索サービスです。

□ お薦めサービス「エラー・メッセージ検索 (Oracle9i)」

<http://otn.oracle.co.jp/document/msg/>

オラクル製品の使用中に表示されるエラー・メッセージについて検索できます。

□ お薦めサービス「TechBlast メールサービス」

<http://otn.oracle.co.jp/techblast/>

OTN Japan では、配信を希望された会員の皆様へほぼ月に 1 ～ 2 回メールをお送りしています。新着情報のほか、会員の皆様に是非ともお知らせしたいセミナーやイベント情報、製品や最新技術に関する連載を掲載しています。

12.4 OracleDirect

OracleDirect では、電話とインターネットを通じて、製品ご購入前のオラクル製品に関するご質問をはじめとする、お客様からの様々なお問合せに対応いたします。

OracleDirect に関する詳細は、次の Web サイトを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/contact/>

□ お問合せ先

TEL: 0120-155-096

FAX: 03-4326-5020

Web 問合せ: <http://www.oracle.co.jp/contact/>

受付時間: 9:00 ～ 12:00、13:00 ～ 18:00（土、日、祝祭日、年末年始を除く）

また、OracleDirect にてお受けできるご質問内容は次のとおりとなりますので、ご連絡の前に確認をお願いいたします。

□ ご質問にお答えできる内容（概要）

- 製品に関して日本国内で公表されている一般的な内容
 - 出荷日、出荷予定日
 - 価格およびライセンス
 - システム要件
 - ハードウェア（メモリ容量、ディスク容量）
 - ソフトウェア（対応 OS、対応コンパイラなど）
 - 製品の基本機能（カタログに記載されているレベルまで）
 - 製品バージョン（RDBMS、Net 等の接続対応バージョンの案内）
 - サポート・サービス契約の概要
サポート・サービス契約の照会、確認、お見積もりはディストリビューションセンターまでお願いいたします。
- カatalog、資料請求、セミナー内容に関するお問合せ
- お客様の個別環境への提案
- 製品概要の説明や応用例、システム構成について営業担当者への直接相談

次のお問合わせにはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

- マニュアルに関すること（オンライン・マニュアルも含む）
- 国内未発表の内容（日本オラクルが正式に公表した内容以外のもの）
- 他社から販売されているオラクル関連製品に関するお問合わせ
- 技術的な内容（テクニカルサポート・レベル）

12.5 サポート・サービス

オラクルではお客様のシステムの健康状態を維持するために、Oracle Support Services をご用意しています。オラクル製品の専門技術者が、様々な形でお客様の問題解決のお手伝いをいたします。

- 障害回避策提示
- 修正プログラムの提供
- インターネット・サポート
- 技術情報の提供など

Oracle Support Services のサポート・サービス契約をお持ちのお客様は、次の技術サポートを受けられます。サポート・サービスには電話やインターネットによる技術サポートのほか、インターネット上での各種技術情報へのアクセス、ご契約済み製品のバージョンアップ用メディアの提供、Oracle Support NewsLetter（毎月）の提供などが含まれます。

□ 技術サポート

ご契約のお客様は、インターネットおよび電話による技術サポートを受けられます。お問合せは、毎日 24 時間受け付けております。お問合せの方法についての詳細は、初回ご契約時にお送りする「Oracle Support User's Guide」をご覧ください。

インターネットでは、次の Web サイトで Oracle Support Services について紹介しています。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

□ OiSC（Oracle internet Support Center）

サポート・センターでは、24 時間ご利用いただけるポータル Web サイトとして OiSC をご用意し、お客様に役立つサポート・サービス関連情報を提供しています。

- サポート関連の新着情報
- インターネット上での Oracle Support NewsLetter の参照
- パッチのダウンロード

- お問合せの受付、更新、状況確認
- 後述の **MetaLink** へのリンク
- サービス内容のご紹介

☐ KROWN

ディレクトリ・サービスやキーワード検索サービスを備えた、25,000 タイトル以上からなる技術情報です。前記 **OiSC** からご利用ください。

☐ MetaLink

Oracle Support Services をご契約のお客様は、**Web** によるサポート・サービスである **MetaLink** を 24 時間ご利用いただけます。**MetaLink** は、全世界から集められた英語での技術情報が収録されている知識ベースです。インターネット上でご覧いただけます。

☐ Oracle Support NewsLetter

毎月更新されるサポート技術情報や、新しいバージョンの製品情報などを **Email** または **Web** でお届けします。**Oracle Support NewsLetter** には以下の情報が掲載されています。

- 毎月の新着情報
- 技術情報（Q&A、**Oracle User** バックナンバーなど）
- お客様へのご案内
- **Oracle Support NewsLetter** は **OiSC** でもご覧いただけます。

□ お問い合わせ先

日本オラクル株式会社 ディストリビューションセンター

TEL: 0570-093812

受付時間: 9:00 ～ 12:00、13:00 ～ 17:00（土、日、祝祭日、年末年始を除く）

ディストリビューションセンターでは、**Oracle Support Services** のサポート・サービス契約について、次のような情報をご案内いたします。

- 新規サポート・サービス契約に関するご相談
- サポート・サービス契約に基づくサービス内容のご紹介
- サポート・サービス契約書の記入方法
- サポート・サービス料金について

または、次の **Web** サイトにアクセスしてください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

12.6 研修サービス

日本オラクルの研修サービスに関する詳しいお問合せは次までお願いいたします。研修サービスに関する詳細は、次の **Web** サイトでもご紹介しています。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

□ お問合せ先

日本オラクル株式会社 オラクルユニバーシティ

TEL: 0120-155-092

FAX: 03-5766-4400

受付時間 : 9:00 ～ 12:00、13:00 ～ 17:00（土、日、祝祭日、年末年始を除く）

13 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

13.1 ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかしスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

13.2 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

